

Plant M

## 『Aftershock』

登場人物

労働者（のちの社長）

男（社長・MCダーク・歌姫・労働者B・労働者シヨージ・農夫・警察2・解体屋・弟）

女（専務・助手・マネジャ・労働者A・雇い主・恋人・警察1・姉）

自転車がそこにある。

天井からは裸電球。

たったそれだけ。

そこに、労働者がいる。

安物の傘を差して。

労働者 「し」息をとめて。微かな二酸化炭素が家をなぎ倒してしまうから。し。息を止めて。少しだけ我慢して、張りつめて、それだけでいい。ほんの一时间あとにその扉を出た時に、少しだけ世界が変わっている。誰も気が付かないだろうけど。気づいたあなたは幸運なのか、不運なのか。これはあなたの物語だ。見ないふりをしないで。僕たちは秘密を共有するんだ。ねえ、悔しいことはね。世界が狂人の感覚だったこと。ねえ、悔しいことはね。世界には解読出来ても打破出来ないシステムがあるってこと。ねえ、悔しいことはね。そのシステムを作ったのは確かにヒューマンだってこと。ねえ、悔しいことはね。どうそのシステムを使っているのか、多くの人は分からないってこと。僕は渦の中において時間は絶えず動き続けて痙攣した日々気がつかない。分析はひとつの時代が終わってから未来の人間によってなされる。今のデキゴトの結果は、後からやってくる。後の世界に。

労働者は、傘をたたむと、

ゆっくりそれを頭上にあげる。

労働者 僕はね、抵抗したいんだ。問い続けたいんだ。ただ、その方法が分からないから。これは、後の世界にどんな衝撃を生み出すのか。

労働者が振りかざしたそれ。

傘と自転車が衝突する一秒前。

労働者が見たものは、

花火のような爆発。

渦を巻いてそれはやがて太陽になり、

渦を巻いてそれは銀河系になり、

渦を巻いてそれは地球になった。

そしてまた渦を巻いて

黒い闇の塊が大きな口を開けて、

それらすべてを飲み込むまでの、

永い永い時間の旅。

一秒の隙間に入り込んだ永遠の宇宙。

入り込んだそれは

労働者の意識でもあるだろう。

あの町の夕暮れ。  
こっちの町の朝焼け

いつかの町の夜空。

向こう町の川の流れ。

手を振っているのはどこかの誰か。

電車が町中を横切る。

窓ガラスに水滴。

梅雨の道路に溜まった水たまり。

映し出されるのは真夏の太陽。

それもぎ取ったらオレンジに変わり。

かじりつく前に風が吹いて稲穂が揺れた。

果てしない金色、ざわめいて。

赤いトラクターが地響きを上げたら。

丸坊主になった大地にみぞれ。

濡れた靴下が乾くころ、

桃の枝の隙間から水色の空。

見上げたのはいつかの町。

花冷えの夜、夜行バスに乗り込んだ。

意識の断片が宙を舞う。

あの夜から、本当は一度も太陽は昇ってはいないんだ。

まだ夜は明けていない。

何年あけていないでしょうか。

もうずいぶん。

まだもう少し。

闇ばかり。

どうしてこうなったか、

僕は知らないことが多すぎて。

それにももう慣れました。

朝を連れてくるためには何が必要か。

夜明けを誰が連れて来るのか。

という問いかけをしていたら腹がへったし、

「社長と専務」

労働者 寒い。

社長 自分裸足やん。

労働者 靴を、買うことが出来ますか？

社長 歩合制やからな。

労働者 ぶあい。

社長 知らんのか？歩合。こらそろそろ降るなあ。

労働者 ぶあい。

社長 がんばったらがんばった分だけ。これ労働のキホンよ。

労働者 いい、仕事がある、と聞いて。

社長 あるある。がんばったらあるある。

労働者 こんな僕でも、働くことができますか。

社長 キミ何が出来るの？

労働者 何も。

社長 なんも？

労働者 労働初心者です。

社長 資格とか聞くだけ無駄やな？

労働者 はい。全くの役立たずです。

社長 キミ役立たずとして気持ちが悪えな。

労働者 体力に自信があると言えるほど体力を使ったことはありません。

社長 うん。見るから死にそうやしね。

労働者 いい、仕事があると聞いて。

社長 キミ自転車こげる？

労働者 は？

社長 自転車。バイスコー。

労働者 あ、はい。

社長 それいこ。

労働者 ああ、はい…？

社長 おい、労働者登録したってくれ。

専務 社長、トイレで新聞読むのやめてんか。

社長 これうちの専務。

専務 ほんま、かなんで。その新聞ご飯食べる時も読んでいやまた降り出しそんな空やところであんた何？

労働者 労働者求ムの貼り紙を見ました。

社長 せやねん。登録手続きやったって。

専務 ほなあんたここに名前。こっちに住所。

労働者 名前…

専務 登録手続きや。一応検索かけさせてもらいます。

労働者 住所・・・

社長&専務 ないんか？

労働者 ……

専務 かまへんかまへん。偽名でもええわ。たいして問題やない。

社長 おかあちゃん、それは少々強引ちゃうか？いや、専務。

専務 社長、うちとご紹介料で食べてるねん。とりあえず人数送り込まな話にならへん。

社長 せやから信頼が一番やろ。

専務 おとうちゃんいや社長。信頼は目に見えてこそその信頼やで。数字。

社長 そういうわけや。

専務 しっかり働いてくれたらそれまでのことはどうでもええねん。

社長 せやけど警察沙汰は困るで専務。

労働者 いえ、そんなことは一度も。ひよこを・・・

社長&専務 ん？

労働者 ひよこを、売っていたんです。今までは…

社長&専務 縁日とかで？

労働者 縁日とかで。

社長&専務 ピョピョ言うやつ？

労働者 ピョピョいう、はい。

社長 それまたレトロなこととしてましたなあ。

労働者 ひよこの黒い目に見つめられると動けなくなってしまう、やめました。その前は工場でネジを締めていました。何の部品かは知りません。その前は終電終わってからの駅のホームの掃除、企業のトイレ掃除、たまにエキストラもやりました。AVですけど。電話の仕事は一日でクビになりましたそれから…

社長 キミ、お芝居やつてるとかバンドマンか何か？

労働者 いいえ。

社長 ある意味労働ベテランちゃうのん？

労働者 いいえ。長続きはしません。だから労働初心者なんです。

専務 社長、ちよつと。

社長 おかあちゃんあれあかんて。あんなん紹介したらすぐにクレームくるがな。

専務 これ以上聞きな。

社長 え？

専務 知らんかったらええねん。あんた根ほり葉ほり聞きな。

社長 そやかておかあちゃん、

専務 今月のノルマあどどのくらい残ってるか知ってるやろ。

社長 知ってるけど、

労働者 あのう。全部聞こえています。頑張ります。頑張って働きます。いい仕事があると聞いてやってきました。夜行バスに乗って。ここで頑張れなかったらもう他に行くところない、という噂も聞きました。だから頑張ります。名前はあります。住所は、今はまだありません。ここに来たばかりですから。

専務 住所はかまへん。ほとんどが住み込み状態になりますわ。はい、で名前が？

労働者 「××××」

専務 健康診断したことある？ないか。舌見せて。舌や舌、ペロ。あーんや。はい、おっけ。健康状態良好。今からすぐ働きに行けるわ。仕事内容は、

ぐらあん、と視界に影が差す。

専務 ちよつと！

専務は壁の向こう側を蹴り上げる。

専務 寝てんか？漕ぎや！部屋暗いがな！

ぼんやりと部屋の明かりがもどってきた。

専務 仕事内容はこれや。

専務はパソコンのキーを叩く。

専務 あほちゃうか思てるやる？んなことあるかい思てるやる？エライ人らは、崩壊の後に何がやってくるんか頭悩ましてるかもしれないけど、うちらは何が起こっても次に行かな、生きていけませんやろ？スキマ狙うんですね。スキマ産業。エコやでークリーンやでー新エネルギーのひとつやでー言うたら色んな人が飛びつきます。そのスキついて小銭稼がな。もうどの業界も飽和してますわ。スキマの働き口があったら誰でも入り込みたいもんですやろ。資源はいつかソコつきるし、危ないもんはみんな嫌や。開発するには時間とお金がかかりますやん？ま、どこがどう儲けるかせめぎ合ってる言うたほうがええんかもしれないけど。うちらほうちらで勝手にやらしてもらいます。人身売買や言う人もおるけど、これも仕事や。最低賃金割ってるけどな。それでも雑巾で原子炉の中拭き掃除させられて高収入と、どっちがええか、あんた選んだらええわ、言うたらどつと求人増えましてん。

ここで生まれて育って生活してこれからもここで生きていきますやん？昨日実家に行ったら妹が泣きながら、姉ちゃんどうして世界はこんな風になっちゃったのって、あほちゃうかうチの妹あほちゃうか。いつまでも実家についてんと働けちゆう話です。お前生まれた時から世界に迷惑かけてること気が付けちゆう話です。あんたその道通ってきた？おもしろかったやろ？かたつぽだけの靴が売られ、いつの雑誌か分からんもんが売られ、あつちはおから通りて呼ばれてる。おから知らん？ご飯よりおからのほうが安いから行列や。男湯しかない風呂屋、女湯なんかあつたら入り乱れる。二十歳の同窓会で分かる真実ここはスラムや。クラスの半分は行方知れず、また半分は刑務所行き。そやから這い上がるんですね。やつたるでー、いうて。そら本人の努力次第やけど努力だけでは無理なんよつて言うても分からん人は多いと思うわ。今子どもが幼稚園で、小学校は私立目指してます。とにかくお金がいるんですね。これ親のエゴちゃいますよ。道が分かれるんですね。前歯がシンナーで溶けてるお母さんとか、見たことある？どこで暮らしてどんな人と会うか、子どもは選べませんやろ。

九州の小倉の知り合いがふらつと遊びに来て驚いてましたわ。

「僕も小倉の悪いところで暮らしてるから分かるんですけど、ここはスゴイ。相当です」  
何がやて聞いたら、

「分からないんですよ。九州なら、葉売ってる人間が誰か、買う人間が誰か、それはすぐに分かるんです。でもここは、分からない。誰がディーラーなのか、誰が買ってるのか、全く分からない。だからこのの方が治安が悪いんです」

見た目に分かりやすい間は安心。この意味分かります？うちら検挙されたら次からの仕事は地下に潜るしかなくなりますねん。逆に言うたらどこでも活動可能いうことになりますわ。見た目は撲滅されたかのように見えても、それはスラムが散らばっただけ。欲しい人がおる限り、なくなりません。正直、どこでもやっていますわ。だって人間がおるんやもん。あたしらは幸い今のところ、明日のご飯を食べるのに困ったことはないし。何や、いつの話してんねんって顔やけど、現在進行形やでこれ。労働者一人登録完了。いやでもええ時代が続いてるわ。街から男が一人姿を消そうが誰も何も気が付かへんちよつと社長！だからトイレに新聞持って入らんとって！

労働者は自転車に乗り込みゆっくりペダルを漕ぐ。  
やんわりと灯りがともる。  
ペダルを止める。  
灯りが消える。

漕ぐ。  
灯る。

止める。

闇。

漕ぐ。

灯る。

止める。

闇。

灯る。

闇。

灯る。

労働者は、自分の仕事内容を把握した。

労働者 …そんなバカな。

「MCダークとその助手」

MC & 助手 UUUUU!

MC & 助手 アフターショック!

助手 ショック、ショック、ショック

MC サテ。そんなバカな世界が来てしまいました。

助手 オオゴトが起こった後にやってくる、

MC アフターショックな情報をMCダークと

助手 その助手がショックにお届けします。

MC & 助手 「自家発電悪徳業者にご注意を」

MC ナントナント、ご自宅で自己完結出来てしまう自家発電機。クリーンな商品。何も足さない、何も引かない。必要なのは、ペダルをこぐ両足のみ。

助手 テレビを見ながら自家発電、ダイエット感覚で自家発電、おしゃべりしながら自家発電。ああ言えばこう言う長女を労働に嫁していただいても、太り過ぎた次女をひたすら労働に嫁していただいても、とうとうクビ切られちゃったお父さんを労働に嫁していただいても、レジ打ちさえもできない長男を労働に嫁していただいても、愛溢れるお母様が労働にいそしんでいただいても自家発電。

MC このようにジョーダンで開発されたものをさらにジョーダンで改造し、労働者に低賃金で違法労働させている昨今の問題。ここに悪質な業者も現れてさらに過酷な労働を強いられる労働者



働者問題。

助手 充電機能はもちろんついてるのよね？

MC もちろん。そうじゃなきゃトイレにもいけない。四時間漕ぎっぱなしで、2時間分の充電。

助手 いつ寝るの!?

MC 一カ月休みなく働いて、次の一カ月を好きに過ごせるっていうのが売り。大きなビル、デパートを自家発電する労働者には寮も完備されているとかいないとか。ちよつと思ひ浮かべて、地下にたくさん労働者。ペダルを漕ぐ音。飛び散る汗、息づかい。

助手 バイキング時代の船底みたい。

MC ナンセンスってナンセンスな言葉を使いたくなるくらいナンセンスだよ。摘発されないようにご用心。

助手 MCダーク。

MC はい？

助手 助手、分かんないんだけどこれってそんなに問題？

MC ちゃんと打ち合せしたでしょ。

助手 違法労働って別にそんなにショックじゃない？てか、自家発電出来たほうがよくない？

MC 助手、このスポンサーどこか分かってる？

助手 え？

MC スポンサーどこか分かってる？

助手 え？

MC え、分かってる？

助手 分かんない。

MC 助手が低能すぎると大問題。

MC & 助手 A f t e r s h o c k !

助手 それでは次の A f t e r s h o c k なニュースです。あら、MCダークどうかなさって？ミサイルが発射されるようですが、今度はどこまで届くでしょうか。結構届く、一票の方はタッチパネルの1を。そもそもあれは火花だ、に一票の方はタッチパネルの2を押してください。

MCダークはどちらに？MCダーク。MCダーク？

MCダークは笑顔のままひっくり返る。

助手 やだ死んでる。これも後遺症。それどころか現在進行形。

「歌姫とマネジャ」

マネ 何やってるんですか!?

歌姫 だめ歌えない。

マネ 歌えます。



り行ってたんで。

労働者B ああ、大量生産タイプね。

労働者A もう見渡す限り自家発電の自転車ばっか。

労働者 テレアポのワンフロアみたいなやつ、ですか？

労働者A そうそう。漕ぐだけって頭ん中ヒマでしょ？初めは周り見てヒマ潰しして、あ、こんな綺麗な子もやってんだ、とか。今にも死にそうなおじいちゃんとかもいたりして。でも、そんなのすぐ飽きちゃって。

労働者B 飽きる飽きる。

労働者A そうすると効率落ちるから、雇い主も工夫すんの。今この人これだけ頑張ってますよ、って電光掲示板に棒グラフが出て、ずっと頑張りをキープしていると、時給に関係してくる。

労働者B あ、俺、大量タイプやったことないからそれ知らないわ。

労働者A 電光の棒グラフとか出されるとなんか頑張っちゃう。必死になって漕いで、マラソンの、あれ、ほら、

労働者 ランナーズ・ハイ？

労働者A そうそう。目に見える目標？みたいなものが出来て、でも電光の棒グラフも自分のペダル充電で光らせてるっていうのが、ちよっと納得いかないけど。地産地消だよね地産地消。労働者B 俺ね、もともと労働者を雇ってたほうで。珈琲屋。ウチ全部オール電化。ここんとこ流行んなくて、もう閉めるかって。悪いねって辞めてもらったの。でもまあ名残惜しくて、最後にもう一回珈琲淹れようと思って、あ、やべえ誰もいないやっつしようがないから一杯分くらい自分で沸かすかって漕いだのが初めて。

労働者A じゃ、今は漕ぎ一本で？

労働者B いや、自分で漕いで沸かしたお湯で珈琲淹れたら、これが妙にうまかったんだ。

労働者 は。

労働者B なんか諦めきれなくてね。次の日から自分でやり始めて、

労働者 本当に全部自家製。

労働者B 最近珈琲うまいよって客に言われたもんね。もしかして漕ぎ手によるんじゃないかって思うね。

労働者A それは気持ちの問題でしょ。自分でやったっていう、充実感みたいな？

労働者B そうじゃなくて漕ぐ人で変わるんだって。

労働者A ホントに！？

労働者B ライブするなら労働者ショージがいいってアーティスト多いみたい。売れっ子労働者だって。

労働者 そうすると、漕ぎのテクニク、みたいなものがあるんでしょうか？

「労働者ショージと雇い主」

労働者ショージ ちよいちよいちよいちよい。

雇い主 何でしょ？

労働者ショージ こんな金額で俺を雇う気？

雇い主 これが労働者の今の最低保証価格なんですけど。

労働者 ショージ 俺ただの労働者じゃないんですけど。

雇い主 すいません。私には理解できません。

労働者 ショージ ちよいちよいちよいちよい。知らない？俺の漕ぎのテクニク。大人気。

雇い主 すいません。私には理解できません。

労働者 ショージ 他の労働者とちよい違う。ペダルのセンス。

雇い主 すいません。私には理解できません。

労働者 ショージ 普通さ、俺に労働頼むのにこんな安いんじゃ出来ないね。

雇い主 すいません。私には理解できません。

労働者 ショージ だから他の労働者と区別しろって言うってんだって。

雇い主 うるさいんだよ黙ってハムスターみたいにカラカラ回って自転車操業してろよたかが労働者のくせに調子こいてんじゃねえぞ。

労働者 ショージ え。

雇い主 すいません。私には理解できません。

労働者 僕は流れ者のように、たくさんのペダルを漕いだ。

「それは緑を育てるもの」

土で汚れた、指。

農夫の指。

農夫は、部屋の板目をじっと黙って見つめている。

恋人 かずおちゃん。

農夫 ああ、来てたの。

恋人 何してるの？

農夫 芽がね、出ないか、見てるんだ。

恋人 芽なんか、出ないでしょ。

農夫 出るよ。ホウレンソウの種をね、蒔いたから。出るよ。

恋人 ここ畑じゃないよ。

農夫 知ってる。

恋人 板張りだよ。

農夫 知ってる。でもよく見て。板目の、

恋人 これ土？

農夫 隙間に全部埋め尽くした。これはね人口土だからキレイだよ。ごめんね、肥料がちよっと匂うけど。

恋人 家の床に？

農夫 かおりちゃん。僕ね、ハウス農家になろうと思って。

恋人 ビニールじゃなくて？

農夫 見たまんまだよ。

恋人 それハウス間違いだね。

農夫 板目にびっしり種蒔くんだ。

恋人 どうやって育てる気？太陽は？風は？水撒いたらどこで寝るの？

農夫 ハンモックでもつろうかな。風はね、たまに仰いでる。風が必要だって、かおりちゃんよ  
く知ってるね。

恋人 太陽は？

農夫 光で野菜って育つんだ。実際にそうやって育てられてるしね。だったら僕に出来ないこと  
もないじゃない。それに今は外で野菜は作れない。また降りそうだしね。

恋人 かずおちゃん。家庭用の光じゃ無理だって。

農夫 知ってる。

恋人 すっごい光の量があるんだよ。

農夫 知ってる。だからね、だから、雇ったんだ。

恋人 何を？

農夫 労働者。

恋人 :

恋人は天井の明かりに視線を向ける。

農夫 それなら僕にも払えるかと思つて。ビニールハウス作る土地も、もうないし、こればっかりはしょうがないね。でも僕野菜作るしか能がないし、

恋人 かずおちゃん。

農夫 土地買ってビニールハウス作るより安いんだ。農業用の太陽代替えシステムよりずっと安いんだ。

恋人 違法労働させてるよ、かずおちゃん。

農夫 無理な労働なんてさせてない。時間も決めてるし、そりや個室じゃないけど。雨はしのげるようにしてあるし。ついたてで通りからは見えないようにしてあるよ。

恋人 この前だつて角つこのスーパ―が検挙されてたじゃない。

農夫 僕は別に儲けていないから検挙なんてされないよ。

恋人 人権団体はどこにでも潜んでるの。

農夫 そんなに悪いことかな。

恋人 前から言おうと思つてたけど、かずおちゃん農業向いてないから！ちよつと！やめて！漕がないで！お願いやめて！

労働者はペダルを緩める。

農夫 いいよ、続けて！

恋人 やめて。

農夫 かおりちゃん、想像してみて。この板目からはハウレンソウ。次の板目からは大根、かぶ、キャベツ。その次はグリーンピース、さやえんどう、エリンギ、しいたけ、その次はレタス、かぼちゃ、きゅうり、トマト、それから次はさつまいも、じゃがいも、みょうが。余ったところには花を植えるよ。かおりちゃん、何がいい？足場がなくなるくらいに緑色の床になって、もしかしたらどこからか鳥や蝶々が迷い込んでくるかもしれない。僕らはハンモックからそれを見降ろすんだ。続けて。

労働者はペダルを漕ぐ。

恋人 かずおちゃん。

農夫 今は試しにハウレンソウを作ってる。

恋人 無理だよ。やめて。

農夫 今はね。土もあんまりよくないし。でもピンチはチャンスって言うし、ハウス農家としては温度を管理すれば季節に頼らず収穫できるかもしれないよ。続けて。

恋人 かずおちゃんそういうの得意じゃないでしょ。やめて。

農夫 工夫すればいいんだと思うんだ。続けて。

恋人 かずおちゃん、農協の検査、いつも不合格だったじゃない。トマトだつていつも水に浮いてたし、沈むトマト作れたためしじゃない。やめて。

農夫 それは、勉強不足っていうか、反抗期の時に家にいなかったから。今から勉強し直すよ。

続けて。

恋人 違うよ。向いてないんだよ。ただ作ってりやいいんじゃないんだよ。売らなきゃ。商品なんだよ。その自覚ある？どうせ自分が食べる分だけ作ってればいいと思ってるんでしょ？やめてってば。

戸惑う労働者。

農夫 かおりちゃん、早い、会話が早いよ。もっとゆっくりじゃダメ？

恋人 ゆっくり？

農夫 ここで、作れるのか。まずそれをやってみないと。作れたら、そうだね、僕とかおりちゃんの野菜を作って、それから、これが売れる価値があるものに出れるのか、やってみないと。

恋人 そんなの待ってたらおばあちゃんになっちゃいそう。

農夫 おばあちゃんになるまで一緒にいようよ。

恋人 かずおちゃん。

農夫 ん？

恋人 ついていけない。

農夫 マジ？

恋人 いい機会だから、農家やめない？

農夫 続けて。

恋人 やめて。

労働者は、農夫の言葉を選んだ。

天井の明かりが煌々と。

恋人 やめてって言うてるじゃない。

恋人 かずおちゃん。

農夫 向いてないこと、やっちゃダメかな。向いてなくても、やりたいこと、やっちゃ、迷惑？僕はねノロマなんだ。なんでもひとつ遅いんだ。かけっこの時にヨーイドンで靴ひも結び直すっていうくらい、ノロマなんだ。あ、って気づいた時にはもうみんなの背中見てるだけ。水に沈むトマトが作れるようになるまで人より倍かかるんだよ。そんな僕がね、すぐ次に行けるわけないじゃない。今僕の頭で考えられる最善なんだ。

恋人 あのね、頭悪くっちゃ農家なんてやっていけないのよ。

農夫 お父さんにもそう言われたことあったなあ。

恋人 どうやって勉強するのよ。頼れる人も、いないのに。

農夫 だけどねかおりちゃん。ちよっとだけワクワクしない？

恋人 …

農夫 この板目から、緑。ここに。一面に。

恋人 それって希望じゃなくて無謀なの。希望ってね、実は根拠があるから希望なんだよ？

農夫 へえ…そうなんだ。

労働者はマツチを擦った。

農夫 日の入りの時間です。

日の入りとともに、部屋の明かりも全て落ちた。  
ゆらゆら揺れる、蝋燭の明かりだけ。

恋人 え？

農夫 帰ったほうがいいよかおりちゃん。寒くなるから、冬の日の入り、17時で全てをストップするから。昼と夜がないと野菜は育たないからね。

恋人 ストップって、暖房は？

農夫 気温の変化も大事だから。

恋人 凍えちゃうじゃない。

農夫 ホウレンソウってね、寒いほどぎゅって縮んで甘味が増すんだ。

恋人 違う、かずおちちゃんのことだよ。

農夫 うん、でも、大丈夫だよ。

恋人 かずおちちゃんって、

農夫 うん？

恋人 優しいけど、無能だね。

農夫 うん。それは自分のせいだよね。

恋人 ついていけない。

と恋人は農夫を抱きしめる。

農夫 あったかい。

恋人 36℃あるから。

農夫 うん。かおりちゃんの分だけ、あったかい。

ふっと蝋燭は風にさらわれる。

と同時に、サイレン。

鳴り、響く。

労働者 注意事項その1. 雇い主と出来るだけ接触しないこと。

「無用なトラブルを避けるためだと言われているが、実際は仲介業者を超えて、労働者が個人として契約することを防ぐため。昨今、個人労働者が急増し、仲介業者を圧迫している」

労働者 注意事項その2. 自分の存在を消すこと。

「クレーム多発に対する注意事項。当たり前のように、ある、という状態を作り出すことを心がける」



労働者 注意事項その3. 摘発されたらすぐに撤退すること。

「速やかにコード類を外し、その場から撤退。仲介業者にすぐ連絡をすること。この連絡がないと連行されたらとみなし、即座に仲介業者のデータから削除される。要するに、捕まったら助けはないということ」

労働者はペダルを漕ぐ。

労働者の髪が揺れ、

外気にさらされたことが分かる。

向かい風に乗ってやってくる町の音に頬を撫でられ、

耳元をかすめ、やがて背中の方こうに町の音が消えていく。

それを繰り返し、労働者は町に紛れる。

「自分が何をしているのかくらいは、せめて知っておきたい」

警察 1 何度も聞くけど、これ君ンだよね？

労働者 違います。

警察 1 乗って走ってたじゃん。じゃこれ盗難自転車？

労働者 違います。拾ったんです。

警察 1 拾って自分のものにしたら盗難にならない？

労働者 違うんです。これは、

警察 1 自転車型自家発電機W O J 2 0 4 0型。最新、そんなこと見りや分かんじゃん。

労働者 いえ、これはポニーです。

警察 1 ポニー。

労働者 ポニー。

警察 1 ポニー。

労働者 ポニー。

警察 1 ポニー。

労働者 ええ、ポ、

警察 1 リピートしなくていい。

労働者 ひとりぼっちで歩いていたらこのポニーが僕のアトをついてくるので、仕方なく一緒に旅をすることになったんです。

警察 1 こんなメカちつくなポニー初めて見た。

労働者 はい、ポニーなんです。

警察 1 君ね。全く緊張感がない。あんまり絶体絶命って思っていない。

労働者 そんな、

警察 1 ポニーで乗り切れるって顔してたじゃん。余裕の顔してたじゃん。

警察 1は労働者を壁に押し付ける。

警察 1 取り締まっても取り締まってもどうしてこう虫みたいにワイてくるかな。

労働者 力、強い、です、ね。

警察 1 見た目でナメてんじゃん。よくないよくないよ。

労働者 あの人、どうになりましたか？種蒔いていた、

警察 1 誰それ何知らないけど。

労働者 あのですね、今回の雇い主は良心的だったんです。

警察 1 求人募集に殺到する君らがいるからいつまでもなくなならない。分かってる？どこの仲介

業者？

労働者 あ、知りません。僕雇われてただけなんです。

警察 1 自分が働いていたところの名前知らないってあり得くない？

警察 2 困る困る困るヒジョーに困る。だめよ、何乱暴っぽいことやってんの、だめえ。

警察 1 あ、平気つすよ。労働者ですから。  
警察 2 後で揉めるんだから。  
労働者 あのを。いつ出してもらえるんでしょうか…  
警察 2 え、何日拘留してんの？  
警察 1 2週間？くらい？  
警察 2 何そんなに長いことしてんの！  
警察 1 えだつて人足りてなくて後回しにしちゃって。  
警察 2 拘留すんのもタダじゃないのよ。さっさと出して。  
警察 1 これって普通何日拘留ですか？  
警察 2 ああ、いいの。  
警察 1 えなんぞ？  
警察 2 キリないでしょ。  
警察 1 そうなんすよ。  
警察 2 そうそう。だから適当に取り締まって、適当に返して。  
警察 1 えーなんか一生懸命やって損じた感じがするんですけど。  
警察 2 ダメだよ、ストレスたまっちゃうよ？  
警察 1 はい。  
警察 2 さっさと解体屋呼ばいいだけなのに。  
警察 1 はい。  
警察 2 あ、アタシが行くわ。あんたじゃまた時間かかりそう。  
警察 1 はい。

警察 2 が姿を消すと、解体屋がさっそうとあらわれる。

解体屋 一基解体か？  
警察 1 早すぎくない？  
解体屋 これなら20分だな。  
警察 1 それ早いのか？遅いの？  
解体屋 急いで始めるわ。降り出しそうな気配だしな。  
警察 1 あそう。  
解体屋 終わるまで待ってるか？  
警察 1 ちよつとタバコ。すぐ戻るから。

その部屋には解体屋と労働者だけ。  
ただ黙々と作業を続ける。  
ただ時間だけが過ぎる。

解体屋 ペダル。  
労働者 はい！？  
解体屋 あんたのペダルは？

労働者 これです。

解体屋 だからどんなペダル？

労働者 これですけど。

解体屋 だからあんたのペダルは何照らした？

労働者 注意事項にありますように、雇い主とは出来るだけ関わらない：言いたく、ないです。

解体屋 あん？

労働者 言ってしまうえば、人の生活を、覗き見して、いやしいなこいつと、思われたくないんです。

解体屋 いやしいのは、あれだ。何照らしてるかも知らないで、ただペダル漕いでるヤツだ。

じつと黙っていた労働者。

やがて、

労働者 …一番初めは、怒れる独身女性を。

解体屋 めんどくさそうだな。

労働者 熱心な平和活動家でした。ちようどいくらいの個室で居心地は良かったんですが、彼女は愛と平和を連呼しながら僕を18時間働かせました。

解体屋 へえ。

労働者 彼女はそううちヴィジョンのコメンテーターなどもするようになって、僕を22時間働かせました。

解体屋 へえ。

労働者 そしてもう少し大きい家に引越すのと同時に、契約は切れました。労働者の人数が3人必要なくらいの家に。彼女は今でも愛と平和を連呼しながらワイン飲んで怒っています。

解体屋 矛盾だなあおもしれえなあ。

労働者 次に、帰らない旦那様を待っている執事を。

解体屋 主不在ね。

労働者 テーブルはいつでも綺麗でした。朝昼晩と毎日決まった時間に食事が運ばれ、まるで旦那様が今まさに帰宅するかのよう。そして食べられることのない食事はワゴンに載せられキッチンへと持ち帰られます。キュルキュル、ワゴンの音だけが聞こえました。執事は自分のために部屋を暖めるわけではなかった。あくまで、帰ってくる旦那様のために。

解体屋 その主は生きてんの？死んでんの？

労働者 そのどちらでもあって、どちらでもありません。

解体屋 それまためんどくさそうだな。

労働者 旦那様は執事であり、執事は旦那様だったのです。

解体屋 世の中には変わった人がいるもんだなあおい。

労働者 ある日夜中に怒鳴り合う声でした。

「旦那様、もう私には出来ません」

「いつものことだよ。商品を届けるだけだ」

「ですが、」

「いいか、売るから使うんじゃない。必要だから買うんだ」

「いつもそうおっしゃいます。使う人の問題だと。でも」  
「届けるだけだ。私たちが引き金を引くわけじゃない」

「旦那様を捕える法は、この世界には存在しないのでしょうか」  
「しないね。世界が必要としているんだ」

労働者 執事も旦那様も、同じ声でした。そこで僕は推測しました。きっと旦那様は世界を飛び回る武器商人なんだと。半年後、彼は奇声をあげて救急車に運ばれて行きました。そこで自動解雇です。

解体屋 あんた、結構ハードなところに派遣されてんだな。

労働者 一塊の団地のペダルを漕いだこともありません。そこは長く続きました。もう古い団地で、建て直しが決まって解雇されました。

解体屋 他には？

労働者 映画館と、ゲームセンターもありました。

解体屋 そうか。で。

労働者 はい。

解体屋 その人たちの、何照らした？

労働者 何って、だから、

解体屋 だからあんたのペダルのポリシーを聞いてんだ。

労働者 は？

解体屋 ポリシーもなしに労働はねえだろ。それ続けるとおしまいになる。

労働者 おしまい？

解体屋 要するにあれだ、凶面上がどれだけ緻密で完璧であっても、現場でネジ締める奴がぬるけりゃほつていても勝手に崩壊していく。俺の商売あがったりだな。

労働者 …

解体屋 なんだ。

労働者 22時間漕ぎ続けた僕に、ポリシーなんかあるわけじゃないです。持てますか？あんたやってみたらいい。早く時間が過ぎないだろうか、まだ3時間、あと3時間。ペダルのポリシー、そんなもの求めるほうが、どうかしてる。僕らのせいじゃない。

解体屋 俺のポリシーはだなあ。

労働者 …

解体屋 解体してくれて依頼されたって、断る権利を持つってのがポリシー。

労働者 言うのはカッコいいですけど。

解体屋 自転車型自家発電機そのものは解体すべきものじゃない。この取り締まりの異常さは何だ？普及すると困る誰かがいるみたいじゃないか？

労働者 は？

解体屋 個人経営するなら解体しねえ。またどつかに入り込んで続けるなら解体する。

労働者 僕に個人自家発電機屋になれって言うんですか。それこそ命とりじゃないですか、今までみたいに雇われてただけって言えなくなる。

解体屋 ポリシーねえやつはそうやって言い逃れるんだ。

労働者 個人なんてやっていけない。

解体屋 それをやっていくんだよ。隙間を見つけて。俺みたいに。

労働者 ああ、そうか。解体するってお金はもらうけど、実は解体しない。うまことやりましたね。

解体屋 俺、ポリシー持つてる職人を増やしたいだけなんだな。

労働者 こことつるんでるあなたは何なんですか。

解体屋 別にポリシーに反してねえよ。

労働者 僕は、生活できりゃいいんです。

解体屋 俺もどっちでもいい。選ぶのはアンタ。仲介業者は無数にある。仕事につく。呪いながら存在消して孤独に22時間労働してりゃいい。

労働者 個人だって、同じことでしょう。自分で自家発電入りませんか？やるほうがよっぽど骨だ。

解体屋 選ばれるんじゃねえよ、こっちが選ぶんだよ。

労働者 あなたが言ってることは、理想です。

解体屋 なかったのか？今までにそんな家は。ああ、こいつのこれを照らしてえなつて。

労働者 いい言葉を教えてあげます。希望は、根拠があるから希望と言えます。

解体屋 もしかして一回もないのか？

労働者 あります！ありますよ…一度だけ。

解体屋 へえ。

労働者 僕だって、見てみたいと思ったから。

解体屋 何を？

労働者 板目の間から、緑…

解体屋 お前緊張感ないな。絶対絶命って思ってないな。

労働者 何がですか。

解体屋 いいこと教えてやろう。一度バツがつくと登録の時に検索に引っかかる。労働者から足がつくから。どの仲介業者も敬遠し始める。だからみんな必死に逃げる。それから年齢がいけばいくほど賃金は叩かれる。

労働者 あ。

解体屋 じゃただの自転車に戻しちゃおうよ。

労働者 …あ。

解体屋 なんだよ。

労働者 ああ。あ、あ、あ…

解体屋 お前ウザいな。

労働者 僕は。取り柄のない人間なもんで。

解体屋 見るからに茫洋してるな。

労働者 全くの役立たずで。

解体屋 お前にカフカの言葉をやろう。「将来にむかって歩くことは、ぼくにはできません。将来にむかってつまづくこと、これはできます。いちばんうまくできるのは、倒れたままだいことです。」

労働者 あのう。

解体屋 どうした？起き上がってみるか？

労働者 あ。

解体屋 見た目は普通の自転車。だから町中で職務質問されることもない。俺じやなきや分らないくらいだ。

労働者 ああ。

解体屋 つまりだ。メンテナンスは俺しか出来ないってことだ。これ名刺な。

労働者 ……なかなかの、商売上手ですね。

解体屋 希望は根拠がなきや希望って言わないんだろ？

解体屋は部屋の外へ声をかける。

解体屋 解体終わりだ。自転車ごと引き上げるわ。

今度は声を潜めて、

解体屋 むっつ向こうの信号のところまで渡してやるよ。

労働者は名刺を受取った。

「それを扱っているのは、ヒューマンである」

ランタンの明かり。

ゆらゆら

ゆらゆらと揺れて、

女のその歩みは奇妙である。

人間のような、動物のような、

妖精のような、妖怪のような。

食卓の上にそのランタンを置いた。

そこへ男がやってきて、食事の用意を始める。

男はゆるやかにミルクを注ぐ。食卓には、じゃがいもとスープ。

男は弟、女は姉。

弟は、姉にスプーンでスープを運ぶ。姉はなかなかうまくスープが飲めない。呆けた姉。

弟  
まずい。

弟  
まずいまずいまずいまずいまずいまずいまずい！

弟  
コンソメ切れてたんだ。

姉  
うー。

弟  
いろいろ切れてるんだ。

姉  
うー。

弟  
家が借りられただけでもいいだろ？

姉  
うー。

姉  
うー。カワ。

弟  
我慢、姉さん、我慢。

姉  
うー。サイ。

弟  
月末まで我慢して。

姉  
うー。なのかかん。

弟  
そう、七日間我慢。

姉  
うー。なのかかんせんそう。

弟  
言える。

姉  
うー。ボウ。

弟  
姉さんそれは視力検査。

姉  
うー。サイ。

弟  
目じゃない、口に持って行く。

姉  
うー。ボウ。の。

弟  
姉さんそれは美顔。



姉 うー。の。カワ。  
弟 ほっぺたじゃない。口に持って行く。  
姉 しゅわっち。  
弟 姉さんもういいからそれ。かなり古いし。  
姉 わらえよ。ばか。  
弟 笑えないよ。ばか。  
姉 ばか。  
弟 ばか。  
姉 へたれ。  
弟 奇形。  
姉 しね。  
弟 お前が死ぬ。

姉と弟は大声で笑い合った。  
労働者はじっとだまって扉の外側。  
しかし思わず、労働者もつられて笑った。

弟 笑うなよ。

乱暴な音。  
お皿がひっくりかえり、スープが零れ、弟が笑う姉を張り飛ばした。

弟 笑うなよ。笑うとこじやないだろう。にやつくなよ。イライラさせんな、こっちは見んなよ。  
お前のせいじゃないけど俺のせいでもないだろういたいいたいいたい！

姉は弟の腕に噛みつく。

弟 いたい姉さんいたい姉さんストップ。

姉 細胞が、生きようとする。のだ。  
毎日死んではがれて新しいものになってく。のだ  
細胞の皮。なのだ。  
あたしの意思なんか関係なく。なのだ。  
細胞が、腹をすかせる。のだ。  
細胞が、あたしを生きさせようとする。のだ。  
最後まで細胞は生きようとする。のか？  
どんな世界だろうと。

労働者は自転車を移動させ、手慣れた手つきでコードをつなぐ。  
そして、ゆるりと自転車を漕ぎ始める。

ふあんと、灯りが部屋を照らす。

弟 ……？

弟が天井を見上げた。

なぜ？電気がつくのだからと動きを止めた。

姉はまだ興奮おさまらず、

弟 姉さん…

弟 姉さん落ち着いて。

弟 どういうこと？

労働者は外側から扉を叩く。

労働者 あのうち。

労働者 あのうち。

弟 ……

労働者 板目の間を見てください。何かの芽が出てやしませんか？

弟と姉は顔を見合わせる。

ゆっくりと、足元。その板目の間に視線を注ぐ。

じっと。

じっと。

見つめる。

姉 あ。

弟 嘘つくなよ。

労働者 あのうち。自家発電いりませんか。

弟と姉は顔を見合わせるが、

食卓に戻り、何もなかったように食事をはじめ。

姉 うー。まず。

労働者 あのうち…自家発電、いりませんか…

弟 金がない。

労働者 あ、え、あ、そうですか。

姉 うー。い。

弟 そんななくてもなんとかなる。

姉 うー。サイ。うー。ボウ。うー。ガ。うー。カワ。うー。うー。うー。

弟は片手でスープを飲みながら、片手で姉を張り飛ばす。

労働者 じゃ、好きにやらしてもらってもいいですか？

弟 は？

労働者 照らしたいものが、そこにあるんです。

弟 は？

労働者 あ、こっちが勝手にするだけなんで、あの、別に、お金は、いいです…

弟 あんた。

労働者 はい。

弟 向いてないんじゃない？

労働者 ということを、再認識しました。

弟 勝手にしたいなら好きにすれば？

労働者 あ。ええ。

弟 ところでさ。

労働者 はい。

弟 あんた何誰？

労働者 僕は労働者です。自転車型自家発電機を動かす者です。それは今となってはもう隠語でした。ネジを締める者も、塗装する者も、鉄骨を運ぶ者も、労働者でしたが、今となってはペダルを漕ぐものを指す。ルートから外れた業者はツツコミと呼ばれ、自営をするものはスキマと呼ばれた。どちらも、正規のルートから外れた。僕はスキマの労働者です。まだ揺るがないポリシ

ーは掴みきれず。他の仕事につけるならその方がいい。

弟 ふうん。よく分かんないけど。

労働者 え。

弟 俺、株やんないから。

労働者 はい？

弟 だから世界の動きが分かんないけど。

労働者 株と世界、と、自家発電がなんか関係が？

弟 いや分かんないけど。言ってることが難しそうだから。最近何がどうなってるのか全然知らないし。見えることしか分かんないから。

姉は殴られたお返しにぎっくり、フォークで弟の腕を突き刺す。

弟 ってえなあもう！

と、姉を突き飛ばした。

仰向けにひっくり返った姉は、下唇を噛んでうううと唸る。  
姉に馬乗りになって再び殴ろうとするが、

弟 あー…これが俺の世界だな。

労働者 え？

弟 あ。

労働者 え。

弟 久々に、人としやべった。あ。朝日。時間だ。

弟 あ。

労働者 はい。

弟 うち盗むもんじゃないし、取るなら命とっちゃってよ。

労働者 いや、僕は、

弟 あー人と喋ってるし。あのさ。

労働者 はい。

弟 仕事行くから。

労働者 …

弟 姉さん、生きてる？

姉 うー。

弟 ああ、助かった。

弟は姉を置いて、家を出る。

家には太陽の光が差し込んでくる。

労働者は自転車をゆっくりと漕ぎ続ける。

労働者 冬の日の出は午前5時前。日の入りの17時まで。

姉は太陽の光を見て、それから不思議そうに天井の電球を見る。

労働者は漕ぎ続ける。

煌々と、姉と床を照らす。姉は、じっと、床を見てしまう。

ゆう ああ まい

と、姉の唇が動く。

労働者、空を見上げた。

労働者 あ。

自家発電機に引っかけてある傘を取り出して差す。

労働者 また、灰が降ってきた。



労働者 (むぐむぐ)  
弟 お供えだと思えば。姉さん、座って。あのさ、普通にお金もらえれば、その仕事って割いいわけ？

弟は姉の口にスープを運ぶ。

弟 割がいいなら紹介してほしいくらいなんだけど。

労働者 …ちそうさまでした…

弟 あんた、悪魔？

労働者 労働者です。

弟 荷物運んでる俺も労働者だし。

労働者 僕の場合、今は限りなく無職に近いという。

弟 芽なんか出ないし、家人中だし。

労働者 だけど土と肥料の匂いがありませんでしたか？

弟 本当にこの家のこと？別の家か…あ、降ってきただろ？

労働者 傘がありますから。

弟 分かんないわ。

労働者 は。

弟 降る前か、降った後か、もう。

労働者 あ。

弟 同じみたいだ。ずっと。

労働者 太陽、もやの向こう…

弟 あんたも頭おかしい？

労働者 …も？…いえ僕は健康です。

弟 あんた、神様？

労働者 いえ。労働者です。

弟 なんで勝手に自家発電してくれてるかぜんぜん分かんないから。

労働者 目的を、持って、みようかと。

弟 なにそれ。

労働者 だから、板目からの、緑を、見てみたくて。

弟 浮浪者が居ついてるって近所で噂になりそう。

労働者 …ああ！そうか、今の僕は、そうだ…

弟 あ、俺はいいの、別に。気が紛れる。

労働者 …？

弟 助かった。

労働者 ひとつ。

弟 ？

労働者 問いかけてもいいですか？あなたの、労働の、ポリシーは何でしょうか？

弟 なんて？

労働者 だから、ポリシー。

弟 あのさ、それいる？

労働者 あ。

弟 人生のポリシーならあるけど。

労働者 それは、

弟 姉さんを殺さないこと。

労働者 …

弟 あんた、本当はこの世にはいないナニカなんだろう？

労働者 …

弟 きつと俺の、幻聴だ。

労働者 …

弟 あんた、神様？悪魔？浮浪者？幻聴？いるの、いないの？

労働者は返事をしない。

弟 午後からの、仕事に行かなきゃ。

弟は姉の口元にスープを持って行く。姉はうまく飲めない。

弟 午後からの、仕事に、

姉はちっともうまくスープが飲めない。

弟 午後からの、

弟は両手で顔を覆った。

姉 うー。ばか。

弟は両手で食卓に並んだ食器を払った。

大きな、音、

カランと最後の音がしたらもう

弟の圧迫された息だけが聞こえる。

姉 …

弟は、また両手で顔を覆う。

姉が、弟の頭を撫でる。

ゆうああまいさんしゃああん

と姉が鼻歌歌う。

弟は両手で顔を覆ったまま。

大きな音を立てて、弟が立ち上がる。思わず、姉は戦闘ポーズを取る。

姉にはそれはある意味「遊び」なのだ。が。

弟は殴らない。

弟（姉さん。コドクなのは、誰なんだろうか。ムリヨクなのは、誰なんだろうか）

弟は、ふらりと立ち上がってゆっくりと歩き出す。

姉は弟にしがみつく。

子どもがじゃれるように。

ゆうああまあいさあんしゃあああん

と鼻歌歌いながら。

弟は払いのけるそれでもしがみつく。

初めは遊びだと思っていた姉も、

次第に、それは遊びではないことが分かってくる。

しがみつく力は強くなる。

振り払う力も強くなる。

床にへたりこんだ姉を、弟は見つめる。

一瞬だけ、とても大切に抱きしめた。

が、弟は背中を見せて、いなくなった。

途端に、姉は立ち上がり、

絶叫しながら歌う。

ゆあまいさんしゃいん

まいおんりいさんしゃいん

ゆうめいくみはつぴ

うえんすかいずあぐれい

ゆるねばのう

ではうまっちあいらぶゆ

ぷりーずどんていくまいさんしゃいんあうえい

姉は大きく手をふる。

いってらっしやいの手をふる。

弟が帰ってくるのか、来ないのか、

姉が理解しているかどうかは誰にも分からない。

労働者はひたすらペダルを漕ぐ。

そして、歌い疲れた姉は、

天井の明かりを見つめる。

夕日が、いつのまにか沈んでいた。

労働者はペダルを漕ぐ足を緩める。

部屋は急速に暗闇。



あの町の夕暮れ。  
こっちの町の朝焼け

いつかの町の夜空。

向こう町の川の流れ。

手を振っているのはどこかの誰か。

電車が町中を横切る。

窓ガラスに水滴。

梅雨の道路に溜まった水たまり。

映し出されるのは真夏の太陽。

それもぎ取ったらオレンジに変わり。

かじりつく前に風が吹いて稲穂が揺れた。

果てしない金色、ざわめいて。

赤いトラクターが地響きを上げたら。

丸坊主になった大地にみぞれ。

濡れた靴下が乾くころ、

桃の枝の隙間から水色の空。

見上げたのはいつかの町。

花冷えの夜、夜行バスに乗り込んだ。

意識の断片が宙を舞う。

あの夜から、本当は一度も太陽は昇ってはいないんだ。

まだ夜は明けていない。

何年あけていないでしょうか。

もうずいぶん。

まだもう少し。

闇ばかり。

どうしてこうなったか、

僕は知らないことが多すぎて。

それにももう慣れました。

朝を連れてくるためには何が必要か。

夜明けを誰が連れて来るのか。

という問いかけをしていたら腹がへったし

弟 寒い。

社長 自分裸足やん。

弟と、

社長の言葉を言う自転車に乗ったままの労働者

どこか姉に似ている専務

弟 靴を、買うことが出来ますか？

社長 歩合制やからな。

弟 ぶあい。

社長 がんばったらがんばった分だけ。これ労働のキホンよ。

弟 いい、仕事がある、と、

社長 あるある。

弟 こんな僕でも、

社長 キミ何が出来の？

弟 なにが…出来る…

弟は、生まれて初めて解放感を得るのだろう。

弟 もう、なんでも、出来るな。なんでも、なんでも、は、は、は…なんでもしますよ。24時間だってもうなんでも。昼休みに帰らなくても、なんでも。俺ね、だってもう自由なんですよ。は。は。は。スープ、飲ませなくても、いいですよ。姉さんの、スープ、は、は、は、

社長 うんうん、座って座って、君自転車こげる？

弟 は？

社長 自転車。バイスコ。

弟 あ、はい。

社長 それいこ。おい、労働者登録したつてくれ。

専務 社長、トイレで新聞読むのやめてんか。

社長 これうちの専務。

専務 ほなあんたここに名前。こっちに住所。

弟 はい。

専務 一応検索かけさせてもらいます。あ。あんた扶養おるやん。2人分は稼がれへんで。ええの？

弟 ええ。もう、いいんです。姉は、一日中、呆けた姉だったので、もう、(おいてきました)

社長 …ああ。生まれつきか？なんかの後遺症？

専務 社長、根ほり葉ほり聞きなて。

社長 そやけど専務、登録するには身辺調査をやな、お、止んだな。

専務 ちやうよ、降りそうな色やないの。

社長 あれは止んだ後の名残りの色や。

専務 ちやうて、降る前の予感の色や。

社長 どっちも一緒か。

弟 世界の、

社長&専務 ん？

弟 世界の、後遺症、かな。

専務 それやったらお姉さん手帳あるやろ。

弟 …手帳…？

専務 そんな呆けてるんやったら、申請してるやる？それやったら何とかなるやん。  
弟 何ですかそれ。

専務 補助とか、保障とか、生活費の、なんていうの？手助けみたいなもん？もらえるもんはもろとかなあ。

社長 でもおかあちゃんいや専務、最近審査も厳しいらしいで。

専務 そうかあ。まあ、重症度にもよるけどなあ。

弟 そんなこと知りません。

社長&専務 ん？

専務 知らんって、知らんの？

弟 知りません。

専務 そんなん調べたらすぐ分かるやん。

弟 ……そんなこと、誰も、教えてくれなかった。

専務 はあ？それ自分で調べな。役所行って窓口でぼけつと突っ立っても情報くれるわけあらへんわ考えたら分かるやる？

弟 ……考える…？

社長 おかあちゃん。

専務 (あら、言い過ぎた？)

弟 考えてたけど、ずっと…どうしたらいいか、とか、でも、考えても、そんなこと、知らないよ……俺、株とか、しないんで。

社長&専務 ん？

弟 だから、世界の動きとか、分からないんだ…

専務 なんや、あんた。器ちいさそうやのに、妄想グローバルやな。はい、登録完了や。仕事内容、容は、

社長 ひたすら漕ぐだけや。

弟 あ。また、降ってきた。姉さん…

ペダルを漕ぐ足に力が込められた。

労働者 という、会話を、その弟がしたかどうかなんて、僕は知らない。

そしてゆっくりと車輪がまわる。

労働者 部屋からはコトリとも音はしない。冬の日の入りから、春の日の入りへ変わる前に、僕は塵と埃だけになる。ああ、腹が減った。部屋からは、コトリとも、音は、しない。ああ、腹が、減ったなあ。最後に、僕は、何を、見るんだろう、か、思い出す、空は、何色だろう、か、ああ、何回ペダルを漕いだ、か、地球を、7週半、塵と埃より、稲妻がいいな、このまま漕げば、ピカリ、どこかに行ける、か、部屋からは、何も聞こえない。

専務 そんなん調べたらすぐ分かるやん。

社長 おい、労働者登録したってくれ。

専務 もらえるもんはもろとかななあ。

労働者 あの町の夕暮れ。

解体屋 ポリシーねえやつはそうやって言い逃れるんだ。

労働者 こっちの町の朝焼け。

警察1 お前緊張感ないな。絶対絶命って思っただけ。

労働者 いつかの町の夜空。

解体屋 現場でネジ締める奴がぬるけりやほつといても勝手に崩壊していく。

労働者 手を振っているのはどこかの誰か。

恋人 それって希望じゃなくて無謀なの。

労働者 電車が町中を横切る窓ガラスに水滴。

農夫 でも僕野菜作るしか能がないし、

労働者 梅雨の道路に溜まった水たまり。

労働者 ショージ だから他の労働者と区別しろって言ってんだって。

労働者 映し出されるのは真夏の太陽。

雇い主 黙ってハムスターみたいにカラカラ回って自転車操業してろ。

労働者 それもぎ取ったらオレンジに変わり。

労働者 B そうじゃなくて漕ぐ人で変わるんだって。

労働者 かじりつく前に風が吹いて稲穂が揺れた。

労働者 A それは気持ちの問題でしょう。

労働者 果てしない金色、ざわめいて。

マネ 歌姫、深呼吸を。

労働者 赤いトラクターが地響きを上げたら。

歌姫 私を組み立てるもの、それと同じよ！

労働者 丸坊主になった大地にみぞれ。

MC サテ。そんなバカな世界が来てしまいました。

労働者 濡れた靴下が乾くころ、

助手 やだ死んでる。これも後遺症。

労働者 桃の枝の隙間から水色の空。

社長 せやから信頼が一番やろ。

労働者 見上げたのはいつかの、

専務 一つの話してんねんって顔やけど、現在進行形やでこれ

労働者 ああ、腹が、減った。

社長 キミ何が出来るの？

労働者 何も。

社長 キミ何が出来るの？

労働者 何も。何も。

社長 キミ何が出来るの？

労働者 何も何も何も。

労働者 あ。灰が。降って。きた。

労働者 休めば、終わる。

労働者 止まれば、終わる。

労働者 あ。また灰が降ってきた。

労働者 このまま漕げば、どこかに、

労働者 どこに、

労働者 行ける、か。

労働者は、息がきれて。

労働者 もう、やめよう。

自転車のペダルを漕ぐ足を、止めた。

労働者 終わらせよう。

労働者は自転車に引っかけてある傘を取り出して、傘を差そうとする。

が、差さずに、両手にしっかりと握る。無言で頭上に振り上げる。

傘は、自転車型自家発電機のサドルにぶち当たる。

荷台にぶち当たる。車輪にぶち当たる。傘は無様にへしゃげる。

自転車自家発電機は、傷つきもしなければ汚れもしない。

労働者の傘だけが、ぐしゃぐしゃの姿になっている。

労働者 ねえ、悔しいことはね。世界が狂人の感覚だったこと。ねえ、悔しいことはね。世界には解説出来ても打破出来ないシステムがあるってこと。ねえ、悔しいことはね。そのシステムを作ったのは確かにヒューマンだったこと。ねえ、悔しいことはね。どうそのシステムを使っているのか、多くの人は分からないってこと。僕は渦の中心にいて時間は絶えず動き続けて痙攣した日々気がつかないっていうこと。分析はひとつの時代が終わってから未来の人間によってなされる。だって今のデキゴトの結果は、後からやってくるから。後の世界に。僕はね、抵抗したいんだ。問い続けたいんだ。ただ、その方法が分からないだけ。これは、後の世界にどんな衝撃を、

コトリと、音がした。

ランタンの明かり。

ゆらゆら

ゆらゆらと揺れて。

弟は姉を背負って立つ。

板目の間をじっと見ている。

背負われた姉が、

息をしているのか、していないのか、

弟だけが知っている。

これが現実なのか疑わしい。ぴったりと体を寄せて、

労働者は部屋の中を想像する。

労働者 ……これは、希望なんてもんじゃない…

労働者はぐしゃぐしゃにへしゃげた傘を、無理やり差す。

もう傘として機能しないものを、

傘として差す。

そして自転車に乗り込み

労働者は、ペダルを漕ぐ。

労働者 予感だ。

板目と姉と弟に、その光が注がれる。

労働者はペダルを漕ぐ。

労働者 あとでやってくる余震と後遺症は、これからやってくる予感と同じだ。前触れと、名残り。僕は予感と余震の間で生きている。

労働者はつぶれた傘を右手に

ペダルを漕ぐ。

労働者 ああ…腹が減ったなあ。

姉を背負った弟はじっと板目を見ている。

じっと。

じっと。

じっと見る。

その板目から見えないだろうか。

小さな芽

弟はかすかに笑った。  
かもしれない。  
それは姉だけが知ってる。  
と、労働者は思ったかもしれない。

雲の向こうではやけに陽気な太陽が、淋しい歌を歌っている。

The other night, dear  
As I lay sleepin'  
I dreamed I held you in my arms  
I awake, dear  
I was mistaken  
and I hung my head down and cried

You are my sunshine  
My only sunshine  
You make me happy when skies are gray  
You'll never know, dear, how much I love you  
Please don't take my sunshine away

You told me once, dear  
You really loved me  
And no one else could come between  
But now you've left me and love another  
You have shattered all of my dream  
You are my sunshine

桜んぼん